２０１２／０２／１９　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：愛は律法を全うする２
聖書箇所：ローマ人への手紙　１３章８－１０節

　みことばを学ぶ前に、皆さんにポール・ブローマンさんのことをご紹介します。すでに何度か話したと思いますが、ブローマン先生は５０数年前に日本人の救いのために日本に来てくださって、その後、２０数年間アメリカに帰ることはなかったのです。日本に来てすぐに為さったことは、日本人に帰化することでした。アメリカ国籍を捨てて日本人として日本人の救いのためにと決心されたのです。そして、東北を拠点にして日本の各地を回っておられます。私が伺ったところ、彼らは一軒一軒回って、その家にご主人が居ないときはまた出直して来て、ご主人にこの福音を語るという、主の命令に徹底して従って福音を伝えようと、そのような働きを５０数年前に始められたのです。ポール・ブローマン先生は、私が昨年の１１月に伺ったときには入院中で、その後、退院なさって、今また肺炎で入院されていると伺っています。ぜひ、皆さんも覚えてお祈りに加えていただきたいと思います。本当にその働きが私たちの国でなされているのです。ポール・ブローマン先生は１０人のお子さんと１２人の養子をもらわれて、２２人のお子さんたちにしっかりとみことばを教えるということで育てて来られました。殆どの皆さんが今日ここにお見えですが、日本だけでなくて世界のいろいろなところでキリストの福音を伝えるために働きをされています。ある人は中国語の聖書の翻訳のために働きをしておられ、ある人はスタジオでいろんな映像を作ったりと、主が与えてくださった賜物を用いて皆さんが活躍されています。そのような人たちが私たちの国に主によって送られたということを覚えて主に感謝をしなければいけないと思います。どうぞ、ポール・ブローマン先生のために、先生はご兄弟とともに日本に来られたのですが、ぜひ、この働きのために、また、皆さんにいろんな機会にこの働きをご紹介して行きたいと思いますが、祈っていただきたいと思います。
　ローマ人への手紙１３章をお開きください。
今日も私たちは「愛は律法を全うする」というテーマでみことばを学んで行きます。１３章８節からです。**「だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。」**、前回見たように、パウロは「もしあなたが必要があって借金をしたのなら、必ず、その返済を行ないなさい。」とそのように命じていました。人から借りたのなら、必ずその返済の責任を忠実に果たして行きなさい、もし、それができないのなら借りてはいけないと言うのです。そのことを話したパウロは、ただし、そこには例外あると教えました。愛に関して、互いに愛し合うことに関しては別であると言うのです。「愛すること」、これは完済が可能である借金とは異なり、返済がいつまで経っても終わらないものである、ずっと払い続けるものだと。生きている間払い続けなければならないもの、あなたが天に行くまで行ない続けて行くべきもの、それが愛すること、それが隣人を愛し続けることであると、そのようにパウロは私たちに教えるのです。
　私たちは前回、どのように愛の実践を為すのかということを１０項目見て来ました。そのリストを見たときに何か思い出しませんか？何かに気付きませんか？（１）良いことをする、（２）犠牲を払う、（３）赦すこと、（４）伝道すること、（５）さばかないこと、（６）つまずきを与えないこと、（７）教化に励むこと、（８）悪口を言わないこと、（９）仕えること、（１０）戒規を行なうこと、これらを見たときに、こんなことに気付かないでしょうか？これらすべては「人に与えること」、人に対して為すことだということです。あなたがだれかのために、このようなことを実践して行きなさい、これらのことを行なっていきなさいと、そのことを私たちはこのリストを見るときに教えられます。つまり、愛がどのようなものなのか、そのことをこのリストからも知ることができるのです。
　神が言われている愛、神が私たちに望んでおられる愛、神があなたに期待しておられる愛とはどういうものなのかということです。その愛とは「与えるもの」です。愛とは隣人の益のために、犠牲的に積極的に与え続けて行くものです。今、どうしてこのような定義を話したのか、まさにそれが私たちが聖書を通して教えられることだからです。
◎愛の実践の模範
（１）主イエス
　主イエス・キリストが私たちのために示してくださった模範、残してくださった模範を思い出してください。ペテロがそのことを私たちに語っています。Ｉペテロ２：２１**「…キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。」**、２４節**「そして自分から**

十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」と、つまり、このペテロのみことばが私たちに教えてくれることは、主イエス・キリストが喜んでご自身を十字架に掛け、そして、死んでくださったのはあなたや私の益のためであったということです。あなたや私の益、すなわち、あなたに救いを与えるため、あなたに罪の赦しを与えるために、主は喜んで自ら進んでご自分のいのちをささげてくださったのです。主が為されたみわざは「与えてくださった」ことです。私たちの益のために、喜んで犠牲的にご自分のいのちを与えてくださったのです。

（２）パウロ

パウロもそのように生きました。エルサレムに行く途中にミレトという所によって、そこにエペソの長老たちを集めました。そこでパウロはアジアでの働きについて人々に語るのですが、使徒の働き２０章でこのようなことを語っています。２０：１８－２４**「彼らが集まって来たとき、パウロはこう言った。「皆さんは、私がアジヤに足を踏み入れた最初の日から、私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか、よくご存じです。:19 私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。:20 益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、:21 ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。:22 いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。:23 ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っていると言われることです。:24 けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」**

このパウロのメッセージのように、パウロはどこにあっても人々のために、彼らの益のためにすべての働きを為したと言うのです。そして、その働きのために自分のいのちが取られることがあったとしてもそれでかまわないと言うのです。パウロが望んでいたことは、人々の益のために喜んで自分自身をささげることでした。自ら進んで犠牲的に積極的に、パウロはそのように歩み続けました。

（３）マケドニヤの教会

もう一つ上げるなら、主でもなく、使徒パウロでもありません。非常に貧しかったマケドニヤの教会です。Ⅱコリント８章に出て来ますが、１－５節**「さて、兄弟たち。私たちは、マケドニヤの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。:2 苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。:3 私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、:4 聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。:5 そして、私たちの期待以上に、神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました。」**。彼らに関して私たちが分かっていることは、このマケドニヤの教会は非常に貧しく様々な迫害を受けていたということです。貧しいから「できません」ではなくて、貧しくても彼らの心が喜んでいたゆえに、彼らは喜んで人々の必要に応えようとしたのです。彼らは決して「私たちは貧しいのだから、私たちはいろいろな迫害を受けているのだから私たちのために援助をください。」とは言わなかったのです。彼らは人々の必要のために、エルサレムの人々のために私たちは何ができるのかを考えたのです。まさに神の望んでおられる愛をここに見ることになりませんか？受けるよりも与えることを考え、人々の益のために犠牲的に自ら進んでささげる、このマケドニヤの人々もそのように神の愛を実践した者たちでした。

◎隣人を愛することと律法との関係について

もう一度、今日のテキストに戻って、パウロはこの８節の後半で**「他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。」**と言っています。**「守っている」**という動詞ですが、これは「厳密に、正確に実行する、果たす」という意味です。つまり、パウロはここで「他の人を愛する人は律法を厳密に正確に実行している、その律法の教えを果たしている人たちだ。」と教えているのです。この**「他の人を愛する」**とはどういうことでしょう？「隣人を愛する」ということです。８節には**「互いに愛し合う」「他の人を愛する」**とあり、９、１０節には隣人を愛することが書かれています。これらは同じことを言っているのです。この８～１０節のみことばはあなたの隣人に対する愛のことです。違った表現を使っていますが、対象は同じです。

では、この「隣人」とはだれを指すのでしょう？結論を言うなら「すべての人」です。確かにパウロは、文脈を見ると、クリスチャンたちに語っているようです。もちろん、パウロはこのローマ人への手紙をローマにいるクリスチャンたちに送るのです。ですから、クリスチャンに対するメッセージだと言うことができます。でも、だからと言って、クリスチャンでない人たち、救われていない人たちが排除

されるのではありません。なぜなら、思い出してください。パウロはローマ書１２章から、すべての人たちに対する私たちの接し方を教えています。教会の中にいる人々やそうでない人々、引いては敵である者たちに対しても、どのように感謝を現わして行くのかを具体的に教えていたからです。ですから、この隣人とは、クリスチャンたちだけでなく、すべての人々、我々が接する必要のある、必要を抱えているすべての人々をパウロは思い描きながらこのみことばを記したと、そのように確信します。

パウロはここで「隣人を愛すること」の大切さを教えています。なぜ、それが大切なのか？「隣人を愛することは、律法、すなわち、主の命令である」、主のみこころであるから大切であると言います。９節に**「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな。」という戒め、またほかにどんな戒めがあっても、それらは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」ということばの中に要約されているからです。**」とあり、パウロはここで、隣人を愛するということはまさに律法の要約である、律法をまとめるとこうなると、そのように語っています。ここに記されている四つの戒めは後で見ますが、これだけでなく、これ以外の戒めも「戒め」とは「神の命令」を指しています。どのような命令、戒めを見ても、それらを要約すると**「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」**ということばになると言うのです。

恐らく、多くの皆さんはあるみことばを思い出されたことでしょう。ある律法学者が主イエスにした質問です。マタイの福音書では、律法の専門家がやって来てイエスを試そうとしてこのような質問をしたとあります。マルコの福音書では、試そうとしたとは記されていなくて、律法学者が一人でやって来て、イエスが為さっている議論を聞いてイエスが見事にお答えになったのを見て、このような質問をしたと書かれています。質問は同じです。マタイ２２：３６－４０を見てください。**「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」:37 そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』:38 これがたいせつな第一の戒めです。:39 『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。:40 律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」**、ですから、パウロが言わんとしたことはこのみことばに明らかです。主が何を望んでおられるのか？すべての創造物に対して、我々人間に対して、神は何を望んでいるのか？心から神を愛する者へと変わることです。罪を悔い改めて、このすばらしい神をあなたの神として救い主として信じることです。そして同時に、あなたの隣人を愛することです。これが律法全体と預言者がこの二つの戒めにかかっている、これが要約であると言うのです。

隣人を愛することの大切さを教えたパウロ、実はこの８節から１０節を見てゆくと、神が望んでおられる愛について、私たちは大切なことを見ます。パウロは大切なことを教えてくれます。三つの神の愛の特徴をパウロはここに示してくれています。

Ａ．神の愛の特徴

１．与えるもの　　９節

パウロは９節からそのことを教えようとします。特に、旧約聖書の四つの戒めを引用してそのことをパウロは教えています。これは出エジプト記２０：１３－１７（申命記５：１７－２１）からの引用です。この四つの戒めに共通しているのは、これらは「禁止の命令」であることです。「してはならない」という命令です。なぜ、この戒めがそのようなことを禁止しているのでしょう？それは、これらを行なうことが律法に反することだからです。ということは、これらを行なわないことが律法に服従することになるのです。「してはならない」と言われたのです。それに従うならば律法に従うことになるし、「してはならない」ということをすることは律法に反することになるのです。９節の初めに書かれた四つの戒め、この禁止の命令が、実は、隣人を愛することと深く関連しています。この四つの「してはならない」とする戒めは、隣人を愛することと非常に深く関連しているのです。ですから、このように言うことができます。隣人を愛していない人はこれらの戒めを行ない、隣人を愛している人はこれらの戒めを行なわない人たちであると。説明します。

（１）「姦淫」：**「姦淫するな」**とあります。不正な性的行為です。「不正な」というのは性行為は夫婦の間に与えられたものだからです。それ以外のものはすべて不正なのです。世の中が何と言おうと、主は「罪」と言われます。不倫であったり、婚前交渉であったり、フリーセックスの時代だから、そのような世の中だから別に何をしても構わないと世の中は言いますが、聖書はそれは「罪」だと言います。ですから、「姦淫」ということばはそういう意味です。不正な性行為のことです。

（２）「殺し」：**「殺すな」**、

（３）「盗み」：**「盗むな」**、

このことば通りです。

（４）「むさぼり」：**「むさぼるな」**、これは「欲深く物を欲しがること」です。際限なく欲しがるのです。

満足せずにどこまでも欲しがり続けるのです。そういう意味です。ギリシャ語の辞典によれば、これは「欲しがる、憧れる」という説明も加えられています。また、ときには、「禁じられている物をむさぼる」という説明もあります。実は、この「むさぼる」ということばは、イエスが山上の説教の中で「情欲を抱いて女性を見る者に関して」このことばを使っておられます。マタイの福音書５：２８に**「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」**とありますが、実は、この**「情欲をいだいて」**ということばです。この**「いだいて」**の前に前置詞が付いていて、これはある目的を表わしています。

ですから、**「情欲をいだいて」**と訳されているそのみことばの意味は「自分の肉欲を果たす、そのような目的で女性を見るならば」ということです。もうすでに、そのときに姦淫を犯していると言います。つまり、自分の中にあるそのような欲、肉欲を満たすために、その対象としてだれかを見るならばもうすでにそのときに姦淫を犯したというのがここで使われていることばです。いつまで経っても満足しない、欲深く欲しがり続けて行く、そのような欲に飲まれてしまって欲を満たそうとする、それがこの「むさぼり」という罪です。自分の欲を満たすために、満足しないでどこまでも欲しがり続けて行く、際限なく欲しがり続けて行くことです。

今、この四つのことを見ましたが、どうしてこれが愛でないのでしょう？先ほどから見て来たように、愛は受けることではなくて与えることでした。この四つのリストを見ると、これらは「奪うもの」です。

（１）姦淫：「姦淫」は清さを奪います。
（２）殺し：「殺し」は人からいのちを奪います。
（３）盗み：「盗み」は人から物を奪います。
（４）むさぼり：「むさぼり」は自分を満たしてくれると思うものを人から奪います。

ですから、どれを見ても与えるものではないのです。全部、自分のためにだれかから奪うのです。だから、愛ではないのです。だからパウロが言うように、これは隣人を愛することではないのです。自分の欲を満たそうとするものだと言うのです。

教会の中にもたくさんの若い人がおられるので、ぜひ、皆さんに聞いておいて欲しいことですが、男性の皆さん、もし、だれかとお付き合いしているとするなら、絶対に絶対に彼女から清さを奪ってはなりません。あなたがその人を愛するのだったら、却って、その清さを守ることです。もし、主が与えてくださった結婚相手ならば、結婚するまでその清さを保ち続けることです。先ほども話したように、夫婦以外の性的関係は姦淫の罪です。また、女性にも言わなければいけません。あなたとお付き合いしている人があなたを「愛している」と言いながら、あなたの体を求めるのであれば、あなたのことなど愛していません。本当にあなたを愛する人はあなたの清さを守ってくれる人です。世の中の愛と聖書の教える愛はこんなに違うのです。世の中は「何をしてもかまわない、自分が満足すれば、自分が良ければ、人に迷惑をかけなければそれでいい」と。主なる神はそのようなことを言っておられません。「このような罪はわたしの教えに逆らうもの、わたしの前にそれらは罪である。」と言われます。

愛というのは、主がそうであったように「与える」ものです。自分のことよりもその人の益を考えて、その人に犠牲的に喜んで進んで与え続けるものです。神が望んでおられる愛、それは「与えること」だと言います。

２．自分のように愛すること　　９節

神が望んでおられる愛は「自分のように愛すること」です。「隣人に対する愛」とは、９節の後半に**「それらは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」ということばの中に要約されているからです。」**とあります。皆さんもお気づきになったと思いますが、**「あなた自身のように」**と書かれています。神に対する愛にはそのようには書かれていません。先ほども見たように**『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』**と、すなわち、あなたのすべてのものをもって神を愛しなさいと言われたのです。ところが、隣人に対する愛に関してみことばが教えているのは**「あなた自身のように愛せよ。」**です。このようにレビ記１９：１８のみことばを引用してパウロはそのことを教えます。「あなた自身を愛するように隣人を愛する」とはどういう意味でしょう？間違いなく、ここでパウロが言わんとしていることは、この自分を愛するというのは非常に利己的な愛でもって「自分さえ良ければいい」という間違った愛で愛することではなく、「自分にしてもらいたいことを隣人にしなさい」ということです。また同じように、「自分にしてもらいたくないことは隣人に行わないように」と言っているのです。

実践＝皆さんも覚えておられるでしょう？マタイの福音書７：１２**「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」**というみことばです。こ

こに**「これが律法であり預言者です。」**とあります。もう少し具体的に考えてみましょう。私たちは自分が傷つけられることを喜びません。自分を愛しているからです。だから、私たちは自分の愛する者が同じように傷つくことを喜ばないのです。自分が除け者にされたり、独りぼっちになることは非常に辛いことです。避けたいことです。自分を愛するから、自分がそのような目に会うことを非常に悲しむのです。そうすると、パウロが言っていること、みことばが私たちに言うことは、そのようなあなたがいやなことをあなたが人にしてはならない。逆にあなたが喜ぶことを人々にしてあげなさいということです。私たちはこんなことを時々聞きます。「教会に来てもだれも声を掛けてくれないので寂しかった。」と。それなら、私たちがすることは、そのような人が一人もいないように声をかける人となることです。なぜなら、私たちは自分を愛するから、そのように扱われることがいやなら、人に対してそのようにしないことです。逆に、自分が喜ぶようなことを人々にして上げることです。「教会に来てもいろいろなグループがあってなかなかそこに入り込むことができない。」ともし言われるなら、隣人を愛するあなたはそのようなことがないように人々を招いて上げることです。

ですから、パウロはここで「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」と、自分にしてもらいたいことを人にしなさい、してもらいたくないことは人にしてはならない、そのように隣人に対して愛を示して行くようにと言うのです。

３．益を為すこと　　１０節

神が望んでおられる愛は「与える」ことだけではありません。「自分のように隣人を愛する」ことだけでもないのです。隣人に対して「益を為す」ことだと言います。１０節**「愛は隣人に対して害を与えません。」**と書かれています。この**「害を与えません」**とは「悪を行なわないこと、間違っていることや正しくないことをしない、危害を加えない」ということです。すでに９節で私たちは「愛は奪うものではなく与えるもの」だと見て来ました。私たちはその人たちの益を考えて、たとえ、そこに犠牲が伴っても彼らのためになることを率先して為してゆくのです。

例えば、私たちの周りにはイエスを信じておられない人、滅びに向かっている人たちが溢れています。我々は彼らの必要を満たそうとします。ときには物質的な必要があるときは私たちはそれに答えてゆこうとします。でも、私たちは究極的に彼らの必要は何かを知っています。この救いがなければ、どんなに物があっても、どんなに名誉があっても、どんなに人が羨むような生活をしていても、彼らは永遠の滅びに向かっているのです。ゆえに、私たちは彼らにとって一番大切なこの罪の赦し、救いを彼らに提供し続けて行くのです。今、皆さんがしておられるように、あきらめることなく熱心にすることです。私たちも後になって思いませんでしたか？「よくぞ私に福音を語ってくれた。」と、友人、また、いろいろな人たちに「私に福音を語ってくれてありがとう。一番大切な、一番すばらしいメッセージを語ってくれた！」と感謝します。私たちも人々の益のために働きを為して行くのです。それが隣人を愛することです。

もちろん、私たち兄弟姉妹の間においても言えます。互いの成長のために働きを為すのです。信仰の成長の妨げを為すのではなくて、我々は人々の信仰の成長のために励まし合って行くのです。パウロがローマ書１４章１９節で**「そういうわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこととを追い求めましょう。」**と言う通りです。私たち信仰者が集まったときに、私たちが考えなければいけないことは、お互いの信仰が成長していくために、それぞれの益のために労して行くことです。だから、１０節の後半に**「それゆえ、愛は律法を全うします。」**と言うのです。このように神が望んでおられる愛をもって隣人を愛するなら律法を全うすることになると言います。この「全うする」ということばは先ほども出て来ましたが、ここでは特に「成就する、完全な実行」という比喩的な意味を持っています。もし、私たちがそのような神が望んでおられるような愛をもって隣人を愛していくなら、確実に、それは神が望んでおられることを行なうことになると言うのです。

さて、パウロがここで教えていることは明らかです。問題はこれをどう実践するかです。今から三つのことを言います。先ず、私たちは神の愛の特徴を見て来ました。これから神の愛の実践です。

Ｂ．神の愛の実践

隣人を愛する者へと変わって行くために私たちが覚えなくてはいけない三つのことです。

１．心からの決意

私はこのような人になって行きたい、主が望んでおられるように隣人を愛する人になりたいと、そのことを決心することです。なぜなら、ここに記されている「愛」は感情の愛ではないからです。そこには意志が必要です。結婚するときと同じです。誓ったのです。「この人だけを愛する」という誓いです。私たちの意志です。ですから、私たちも主のみこころを知ったときに、私たちがいつも自らに問いかけ

なければいけないことは、私はそのような人になりたいのかどうかです。主のみこころに沿って私も生きて行きたいのかどうかです。そのことを私たちは決意しなければいけません。

２．神の助け

当然のことですが、私たちがこのような人になって行くために必要なことは「神の助け」です。この８～１０節で言われている「愛を示す」ということは、神に対する愛ではありません。隣人に対する愛です。しかし、隣人を愛してゆくためには、神に対する愛が増し加わっていなければ不可能だということも私たちは知っています。みことばはこのように言います。Ｉヨハネ４：１９－２１**「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」**と、隣人を愛するためには、私たち自身が神の愛を分かっていなければいけないのです。神の愛を知ることによって、その愛をもって私たちは隣人を愛することができるのです。ヨハネは続けてこのように言います。**「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。:21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。」**。

今、私たちが気付かなければいけないことは「私は神が望んでおられる愛をもって人を愛することは、残念ながら、私には無理だ」ということです。そのことに気付いたときに、私たちはそれを可能にしてくださる神に助けを求めるのです。そのように生きて行きたいという決心をしました。でも、それを実際に可能にしてくださるのは「神のあわれみ」でしかないのです。「主よ、私はそのようなあなたが望んでおられるような隣人を愛する者として成長していきたいです。」と、そのためには神にその助けを求めなければいけないのです。

ヨハネは同じＩヨハネ４：７で**「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。」**と言っています。神の愛をもって人を愛することができるようになるには、神の愛を自分自身が受け入れていないといけないし、そして、いただいたその神の愛が私の内で成長していなければ、そのような愛をもって隣人を愛することはできないのです。簡単なことです。ですから、私たちは「このような人になって行きたい、神が望んでおられるように隣人を心から愛する者になりたい。どうぞ、主よ、私を助けてください。あなたに対する愛が私の内で増し加わって行きますように。そして、その愛をもってあなたが望んでおられるように私の隣人を愛することができるように、どうぞ、私を助けてください。」と願うのです。

３．心を吟味する

神の愛の実践に関して私たちは、決意するだけでない、神の助けをいただくだけでない、私たちは常に自らの心を吟味することが必要です。心の吟味です。隣人を愛するというのは律法ではないのです。それを実践すれば救われるということではないのです。なぜなら、どれ程律法を守っても私たちは救われることがないし、私たちは律法を完全に守ることができないからです。行ないによって救いを得ることはゼロです。絶対にあり得ない！でも、救われた者として私たちは、神に喜んでいただきたいから神の望んでおられること、みこころを行なっていきたいと思います。

しかし、私たちはそのような神に喜んでもらいたいという純粋な正しい思いで始めたことが、時間とともにただの習慣、義務になってしまう危険性があるからです。よく皆さんもご存じのように、黙示録の中で、エペソの教会が称賛とともに神によって警告されています。なぜ彼らが警告されたのか思い出してください。それはエペソの教会が「初めの愛」から離れたからです。こう言われるのです。**「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。:3 あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。」**（黙示録２：１－３）、すばらしいことを行なっているのです。でも、神は彼らを非難しました。なぜか？それは行ないはあるけれど動機がどうかだったのです。初めの愛をもって、神を心から愛するがゆえに為しているのかどうかということだったのです。

私たちも悔い改めなければならないことがあります。感謝をもって行なって来た働きが、いつの間にか、働きは継続していながら感謝を失ってしまっている。神を愛するゆえに喜んでやっていることに次第に喜びが薄れてしまって、ときには重荷と感じることが出て来ます。だから、私たちはいつも自分の心を吟味しなければいけないのです。何のためにやっているのか、だれのためにやっているのかと。なぜなら、神の関心は私たちの行ないではなくて私たちの心だからです。イザヤはこのように言います。イザヤ２９：１３**「そこで主は仰せられた。「この民は口先で近づき、くちびるでわたしをあがめるが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれてのことにすぎない。」**と。マタイの福音書１５：８でも**「『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れてい**

る。』と、このように神は彼らを非難なさったのです。

信仰者の皆さん、私たちが覚えなければいけないのは、私たちが何をするのかではなくて、どのような思いをもって生きているのかです。あなたがどんなことでも、すべてのことを神への感謝として為しているなら神はお喜びになります。神を愛するゆえに為しているなら喜んでくださる。そういう思いをもって私たちはすべてのことをしているかどうか、いつも自分の心を吟味しなければいけないのです。私たちは弱い愚かな者です。そうしなければいつの間にかその感謝も薄れて行きます。喜びも薄れて行きます。

今日、私たちは「隣人を愛する」ということ、そのことをこのようにして見て来ました。パウロは私たちに「愛は律法を全うする」と言いました。このように神の愛で隣人を愛すること、それはまさに神が教えてくださっていること、神が命じておられることを私たちが実行することになると言います。どうぞ、信仰者の皆さん、神からいただいた愛を与え続けてください。自分のことを後回しにして、人々のために、彼らの益のために、それがクリスチャンであろうとそうでなかろうと、彼らの益のために私たちは喜んでこのキリストの愛を示して行くことです。隣人を愛する者として、この偉大な神のすばらしさを証し続けてください。隣人を愛する者、まさに、その人は主のみこころを行なう者たちです。そんな人としてこの一週間歩んでください。祈りをもって、神の助けをいただきながら、主の望んでおられるようにこの一週間歩まれることを心から期待します。

《考えましょう》

１．なぜ、隣人を愛することが主に喜ばれるのでしょう？

２．自分のように隣人を愛するようになるには、どうすれば良いのでしょう？

３．心を正しく保つためには、どうすれば良いのでしょう？